

## 風姿花伝第三、問答条々

四 立合勝負の不審

問。此勝負に於て、是に大  
なる不審あり。はや劫入た  
る為手の、しかも名人なる  
に、只今の若為手の、立ち  
合ひに勝つ事あり。これ不  
審なり。

(口訳) 問。立合勝負の勝ち負けについて、一つ大きい不審な事があります。それは、既に年劫を積んだ為手で、しかも名人である為手に、まだ若輩の為手が、立合勝負に於て勝を得る事があることです。そのわけがどうも不思議ですが、どうしたわけでありませうか。

答。これこそ先に申つる、

三十以前の時分の花なれ。

古き為手は、はや花失せて、

古様なる時に、珍しき花

にて勝つ事あり。眞実の目

利きは、見分くべし。さあ

らば、目利き、目利かずの、

批判の勝負になるべき歟。

さりながら様あり、五十以

来まで、花の失せざらん程

の為手は、如何なる若き花

なりとも、勝事は有るま

じ。たゞこれ、よきほどの

上手の、花の失せたる故に、

答。これこそ、前に述べた「三十歳以前の時分の花」による勝利である。

老いた為手が、もはや見物の眼を惹きつける花、も失せ、古風なものになつてゆく時分に、若い為手が、珍らしさといふ花で以て勝つ事があるものである。

しかし、眞実に眼の利く鑑賞者は、何れがすぐれてゐるかを、十分に見分けて、一時の珍らしい花などに眩惑される筈はないだらう。かうなると、結局、鑑賞者の目が利いてゐるか、居ないかといふ事の優劣の論になつて来るかと思ふ。しかしながら、ここに仔細

がある。それは五十以後までも芸の花の失せないほどの為手であれば、如何に若さの花のすぐれた為手でも、これに打ち勝つといふ事は無いであらう。若い花の為手に負けるといふのは、ただそれは、普通の上手といふ程度の為手が、自分の花の失せてしまつて居る為に、負けるのである。譬へを以ていへば、如何なる名木といつても、花の咲いて居ない時の木を、賞翫する者があらうか。たとひ犬桜の一重の花でも、初花のいろいろ美しく咲いて居る方を誰でも賞翫するに相違あるまい。かや

負事あり。いかなる名木

なりとも、花の咲かぬ時の

木をや見ん、犬桜の一重な

りとも、初花色々と咲ける

をや見ん、かやうの譬ひを

思ふ時は、一旦の花ないと

も、立合に勝は理なり。

されば、肝要、此道はたゞ

花が能の命なるを、花の失

するをも知らず、本の名望

ばかりを憑む事、古為手

の、返々誤り也。物数をば

似せたりとも、花の有る様

を知らざらんは、花咲かぬ

うな譬へを思つて見れば、たとひ一時的な時分の花であつても、立合に勝つといふことのあるのは理りである。

前に述べたやうな訳だから、結局、

此の能樂の道に於ては、花が能の命であるのに、その命ともいふべき大切な花が失せて居る事に気附かず、以前の名望ばかりを憑んで居るといふのは、古い為手の重大な誤りである。たとひ、能の物数を巧みに似せて物真似がうまくとも、花といふものが如何なる点にあるものかといふ事を自覺しない為手の芸は、丁度花の咲かない折の草木を集めて見るやうなものである。万木千草に於て、花の色は皆それぞれに異なるが、面白い美しいと感ずるのは、

時の草木を集めて見んが如し。万木千草に於いて、花の色は皆々異なれども、面白しと見る心は同じ花なり。物数は少なくとも、一

向の花を取り究めたらん為手は、一体の名望は久しう

るべし。

されば、主の心には、隨分

花ありと思へ共、人の目に

見ゆる公案無からんは、田

舎の花、藪梅などの、徒に

咲き匂わんが如し、又、同

上手なりとも、その中にて

等しくその花がさいてゐる点にあるのだ。たとひ演じ得る物真似の数に於ては少くとも、一方面の花を究め尽した為手ならば、その一体の芸についての世の名望は久しくつづくであらう。

かやうな次第であるから、為手自身の心持では、自分の芸には隨分に花があると思つて居ても、その花が見物の目に見える花となつて咲くには、如何にすべきものかといふ工夫公案がなくては、田舎の花や藪梅などが、徒らに咲き匂ふやうなもので、誰もこれを美しい花とは賞翫しない。又、同じ上手といつても、又その間には段階があるものだ。たとひ芸に於ては隨分に究め尽した上手名人でも、この花、といふも

重々あるべし。たとひ、隨分究めたる上手名人なりとも、この花の公案なからん為手は、上手にては通るとも、花は後までは有るまじき也。公案を究めたらん上手は、たとひ能は下がるとも、花は残るべし。花だに残らば、面白さは一期あるべし。されば、眞の花の残りたる為手には、いかなる若き為手なりとも、勝つ事はあるまじきなり。

のについて工夫公案することを欠いては、上手な人だとしては世間に通つてあり得ないだらう。花に関する工夫公案を究めた上手なれば、たとひ老いて伎芸は下つても、花は生涯残るであらう。花さへ残るならば、その人の芸の面白きの魅力は生涯あるに相違ない。だから眞の花が残つて居る為手に対しうては、如何に若く時分の花の匂はしい為手でも、勝つ事は不可能だと思ふ。

「花が能の命」といふ一語がこの段の眼目である。その例は前半に先づ露骨に例証せられて居る。劫の入つたしかも名人とまで許された為手が、駆け出しホヤ／＼の若為手に、立合勝負で後れを取るなどは、全く花の問題に心をひそめ工夫をこらさぬ所からの蹉跌である。眞の花に敗れるならばとにかく、一時的な時分の花、珍しい花などで敗れをとるなどは、上手とも言はれるものには堪へられない無念ではあるまい。勿論、眼識ある批評家は、勝を得た理由が一時の花にあつて、眞の芸の花でないことは看破するであらうけれども、盲千人眼あき開一人の世の中では、批判の高下などは一般的には通用しない。ここに舞台芸術家の悩みもあり、又工夫の必要も生れるわけである。

しかし、これは、世阿弥に言はすれば「よき程の上手」であり、花の失せたことに氣づかぬ程度の為手なのである。五十以後まで花の失せない為手ならば、如何なる若い花でも勝てつこは無いといふ。世阿弥がこの鉄案を下す際に、彼の眼裏に彷彿と去來したものは、亡父觀阿の面影であつたらう。

どんな名木でも花の無い際の木を、誰が賞翫するものか、たとひ、

犬桜の一重咲きでも、花さへ咲けば人が見るではないか。この譬へも痛切、骨をさす感がある。本の名望を憑むほど、他所目に氣の毒に映ずるものはない。

次の問題は「花の公案」に移る。「花のあるやうを知る」ことであり、「人の目に見ゆる公案をつくす」ことである。ここでははつきりと、伎芸と公案とを区別して居る。後に「種はわざ、花は心」といふ語を提出して来るが、その「花は心」の問題に進めて居る。そして、この「花の公案」だに透過するならば、たとひ伎芸はよし少々落ちても、花は決して散らないし、花さへ残るならば、見物の心を惹く面白さは生涯失せないだらう、さすれば、如何に若い花でも、決してこれに後れを取る事はないといふ。かく攻めたてて来る時、何人も「花の公案」が如何に重大なものであるかを感じざるを得ない。しかし世阿弥は満を持して放たない。その解答は、別紙口伝にまで持ち越されてゐる。不親切なやうで親切を極めたものである。先づ考へしめる、先づ苦しませる、そして機の熟するのを待つて、以心伝心、電光石火の間に大悟徹了せしめる行き方の妙味はここにある。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著